

# 人物の意思決定を吟味する社会科歴史人物学習の授業開発

## —エンパシー能力の育成を目指して—

教育実践高度化専攻  
小学校教員養成特別コース  
P10070B 常田 義人

### 1. 問題の所在と研究の目的

小学校第6学年における歴史学習の特徴として、「人物の働きや代表的な文化遺産を中心に」学ぶということが挙げられる。歴史の授業において、特に重視されてきたことは「歴史上の人物に思いを寄せること」である。教師は人物の感情を想像させるために、共感を通じて得られる普遍的な感情や行動を児童に問う。一般的に、歴史上の出来事と日常生活の出来事を結びつけ、「共感」によって歴史の因果関係を説明し、児童の理解を促すといった授業展開が行われてきた。

英語にはシンパシーとエンパシーという「共感」を指す2つの語がある。この違いは、相手のことがわかるという前提で考えるのがシンパシー、相手のことはわからないという前提で考えるのがエンパシーである。現状の歴史人物学習は、普遍的な感情や行動を基に歴史上の出来事と日常生活の出来事を結びつけて捉えるため、シンパシー型の授業であると考えられる。

しかし、歴史学習で取り扱う遠い過去の世界は、文化も生活習慣も価値観も、現在とは異なる。そのような異質な世界で起こる出来事を、児童が日常生活と結びつけ、人物の気持ちを想像だけで捉えることは困難ではないだろうか。対象とする人物の目的や立場、その場面で置かれていた状況等を分析することで、始めてその人物像が浮かんでくる。従って、同じ人物への「共感」でも、シンパシーのような普遍的な感情の想像に基づく授業ではなく、エンパシーのような人物の分析に基づく授業づくりが必要ではないかと考える。

そこで、本研究ではエンパシーの発想を取り入れた小学校第6学年における歴史人物学習の授業開発を目的とする。

### 2. 研究の方法

- ①先行研究や文献資料を基に理論研究を行い、授業仮説及び分析の視点を設定し単元構成を設計する。
- ②単元構成を基に検証授業を行い、実践内容の分析と授業仮説の検証を行う。

### 3. 研究の内容

#### (1) 理論研究

歴史教育におけるエンパシーについて原田(2012)は歴史的エンパシーを深化・発展させる歴史人物学習の授業プランを提案している。歴史的エンパシーでは、過去の見方は現在と異なることを前提とし、過去の人物の見方と現在の自分の見方が異なることを理解することを最大の目的としている。しかし、原田が提案したこの授業プランは中学校を対象としたものである。また、小学校における歴史的エンパシーを意識した授業実践はまだ殆ど見られない。

小学校における歴史人物学習の先行研究として小原(1987)の「意思決定力を育成する歴史授業構成」を挙げる。人物の意思決定に着目した小原の授業構成には、エンパシーの発想と重なる点がいくつか見られる。そこで、歴史的エンパシー論に歴史上の人物の意思決定を取り入れた授業を構想した。これを基に、授業仮説及び分析の視点の設定と単元構成の設計を行った。

#### (2) 検証授業

【対象】兵庫県I市立I小学校第6学年の児童37名

【時期】第1回授業(2012年9月21日金曜日1時間目)

第2回授業(2012年9月24日月曜日5時間目)

第3回授業(2012年10月9日火曜日6時間目)

第4回授業(2012年10月11日木曜日1時間目)

### 【授業仮説】

「歴史人物学習において、人物の意思決定のプロセスを明らかにし、人物の立場に立って意思決定をすることで、エンパシー能力の育成が可能となる。」

### 【分析の視点】<sup>(1)</sup>

「人物の意思決定を吟味することで、歴史的エンパシーの深化・発展が見られたか。」

### 【単元構成】<sup>(2)</sup>

単元：「江戸幕府による政治」

次	時	活動内容
事実関係	1	「なぜ徳川家光は参勤交代をさせたのだろうか？」という問いを追求する。
	2	「なぜ徳川家光は鎖国したのだろうか？」という問いを追求する。
意思決定	3	「なぜ徳川家光はポルトガルの来航を禁止したのだろうか？」という問いを追求する。
	4	「自分が徳川家光だったらどんな選択をするだろうか？」という問いを追求する。

以上の授業仮説・分析の視点・単元構成で授業実践を行った。

## 4. 研究の成果

全4時間の検証授業について、分析の視点に基づき授業仮説の有効性を検証した。分析の方法としては、授業記録における児童の発言内容とワークシートにおける児童の記述内容を基に、各児童の歴史的エンパシーの段階を割り出した。分析の結果、次の2点が成果として挙げられた。

- ①「事実関係の分析」において、人物の立場を理解させることで、歴史的エンパシーを「日常的エンパシー」から深化・発展させることができる。
- ②「意思決定過程の分析」において、人物の見方を意識させることで、歴史的エンパシーを「ステレオタイプのエンパシー」から深化・発展させることができる。

①は「事実関係の分析」において人物の立場を理解させることで、過去の人物の観点を獲得することが可能であることを示している。また、②は「意思決定過

程の分析」において人物の見方を意識させることで、過去の見方と現在の見方を区別して判断することが可能であることを示している。

すなわち、人物の意思決定を吟味する活動において、「事実関係の分析」と「意思決定過程の分析」を行うことで、歴史的エンパシーを深化・発展させることが可能となるのである。

## 5. 今後の課題

本研究では、エンパシー能力を育成する歴史人物学習の授業開発を目指した。分析の結果、人物の意思決定を吟味することで歴史的エンパシーの深化・発展を促すことは可能であることがわかった。しかし、本実践において歴史的エンパシーが「区別されたエンパシー」まで到達した児童は5人とどまった。このことから、さらなる授業改善が求められる。

また、本研究を通してエンパシー能力を育成すれば、より歴史上の人物の立場に立った意思決定が可能であることが実証できた。このことから、エンパシー能力は意思決定力にも影響を与えるのではないかと推測する。社会科の本旨は市民的資質の形成であり、それに不可欠なのが意思決定力の育成である。エンパシー能力がどのように意思決定力に影響するのか。エンパシー能力の向上が意思決定力の向上につながるのか。両者の関係性を明らかにすることで、歴史学習における意思決定型授業のさらなる質的向上を図ることができると考える。以上の2点を今後の課題としたい。

### 【註】

- (1)歴史的エンパシーは次の4段階で深化・発展する。  
①エンパシーのない状態 → ②日常的エンパシー → ③ステレオタイプのエンパシー → ④区別されたエンパシー
- (2)単元構成における「事実関係」とは「事実関係の分析」を意味しており、「意思決定」とは「意思決定過程の分析」を意味している。